

令和6年度 学校関係者評価報告書

大阪市立市岡中学校 学校協議会

1 総括についての評価

- ・一方通行の授業形態の改善への取り組みは計画どおりに進んでおり、校内調査における対話的で深い学びにかかる質問への最も肯定的な回答の割合も昨年の43%から49%と増加している。今後も学習活動において、工夫および改善を図り、学力向上にむけて取り組んでいく。
- ・数値目標だけで判断すると達成できていないが、不登校生徒の出席できる日数が増加していたり、別室登校している生徒向けに補充授業を行うことで学力向上につながったり、次年度に向けて教室へ戻ることを目標に行動している生徒がいたりしており、内容としては改善傾向にある。
- ・現在行っている取組について振り返り、継続すべきところと改善すべきところを分析し、生徒と教職員、保護者や地域と連携を取るとともに、取組に関する情報を発信し、取組の質を高めていく。

《ご意見》

現在行っている取り組みについて、継続すべきところと改善すべきところについて、分析結果から具体的にハッキリさせ、それを全教職員で共有して、進めていく必要がある。

2 年度目標ごとの評価

年度目標	達成状況
(Ⅰ) 安全・安心な教育の推進 ・年度末の校内調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する生徒の割合を82%以上にする。 (R5 77%)⇒82% ・年度末の校内調査における、不登校生徒の在籍比率を前年度より減少させる。 (R5 9.8%)⇒12.8% ・年度末の校内調査における、「自分には、良いところがあると思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を75%以上とする。(R5 72%)⇒75% ・多様な学びを保障するための場所を1教室以上、担当する人材を2名以上確保し、市岡中スタンダードver3.0の定着を図り、不登校生の減少につとめる。⇒確保できている	B

《ご意見》

不登校については、市岡中学校だけでなく、大阪市や全国的にも増えている状況がある中、不登校対策として学校独自で成果があったことはどんなことか。
⇒こまめに電話連絡し、生徒本人や保護者と話す機会を作ったり、家庭訪問する機会を多く持つたりすることで、関係性が築かれ、登校につながっているケースが多くみられている。

年度目標	達成状況
<p>(2) 未来を切り拓く学力・体力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度末の校内調査における「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する生徒の割合を50%以上にする。(R5 43%)⇒49% ・中学校チャレンジテストにおける国語および数学の平均点の対府比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.1ポイント向上させる。 (R5[1年]国語0.97/数学0.98 [2年]国語0.95/数学0.90)⇒[3年]国語0.99/数学0.85 ・全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点の対全国比を男女ともに前年度より0.05ポイント向上させる。(R5 男子1.03/女子1.04)⇒男子1.03/女子1.04 ・中学校チャレンジテストにおける社会・理科・英語の平均点の対府比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.1ポイント向上させる。 (R5[1年]英語0.96・[2年]社会1.03/理科0.75/英語0.93)⇒ [3年]社会0.91/理科0.88/英語0.96 ・授業評価アンケートにおける「授業はめあてと振り返りがわかりやすく提示されていますか」に対して、学校平均を3.55ポイント以上とする。(R5 3.48)⇒3.53 	B

《ご意見》

特別支援教育サポーターとして授業に入り込み支援している中で、英語科で「単語は努力」を合言葉に、授業の流れがルーティン化されており、書くことをしなかった生徒が書くようになり、書ける数が増えていき、そのことを教員が褒めるというかたちで、結果につながっている様子が見て取れている。

年度目標	達成状況
<p>(3) 学びを支える教育環境の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。⇒38.5% ・「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1を満たす教職員の割合を50%以上にする。⇒39.53% ・地域の人と協働し、学校内居場所事業「はとばカルッチャ」を週に1回程度開催し、生徒の自己有用感を高める。⇒週1回程度開催している 	B

《ご意見》

スマホを教員より子どもたちの方がうまく使える部分もあるが、ＩＣＴ機器の活用の仕方について、全く知らない生徒へは、触れる機会をもち、教えていく必要があるだろう。働き方改革については、しっかりと取り組み、どういう風に改善していくのか、教職員がつかれることないよう、子どもたちにとって教育職があこがれの対象になるよう、考えていかなければいけない。

3 今後の学校園の運営についての意見

周囲のご家庭でも、教員の家庭訪問により、学校へ行くことができるようになったという話を聞くので、ぜひ、家庭訪問は続けてほしい。

部活動について、時間外労働とも関係してくるのかもしれないが、今後どのように動いていくのか関心がある。

ＩＣＴ機器を授業でどのように活用しているのかについて質問があった。

不登校については、小学校と中学校で連携しながら、また、区役所など関係諸機関とも連携しながら、対応策について考えていくことを今後も進めればよいのではないか。